玉はとびちる（みのぶ）

玉はとびさる
青いろ水は
みをやたまやに
ほろとなく

ちらり〳〵と（寮の窓から）

ちらり〳〵と
涙に光る
星のなくのに
なぜなかぬ

菊

久遠寺の庭に咲きける白菊の心うれしく香りつるかな　田川恵良

白菊の盛りと見ゆるさ庭べに朝日さすなり寺の静けさ　同

久々にみ山訪づれ庭菊のなつかしう見ゆ花の色と香　同

さ庭べの東をさして咲き匂ふ園にほの見ゆ菊のま盛り　同

山寺に菊の盛りとなりぬれば土の香いとゞなつかしき哉　同

我が庭に秋訪れて白菊のいま〻盛りと咲きにほふ夕べ　同

鉢菊の枯れたる夕べに法の雨恵みに生えて又盛りゐぬ　同

秋ふけて薄き黄色に咲き出づるさ庭の小菊懐かしき哉　同

杉桓のもとに一本寒菊は霜にうたれて淋しく笑めり　下田雨女

秋愁

夜もすがら吹きにし風にものなやむ苔の衣につゆ結びけり　田川恵良

秋くれば寂しさましぬさ庭べに鈴虫の啼く夕べなるかも　同

もの憂ふるわが此の頃の顔をやせませりよと君はいわるも　今泉智旭

つくづくとわが淋し顔をながめゐる我が身の如く君